

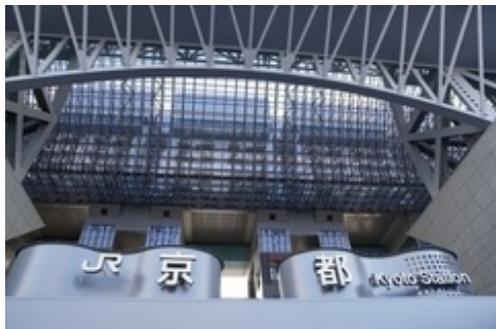


杜の都で私を愛して  
南海部 覚悟

余生を妻と一緒に、列車の個室で過ごしたいと思うことがある。

心地良いジョイント音のリズムの下、めくるめく車窓に想いを馳せながら、軽やかな振動に身を任せ、ゆっくりと瞼を閉じ、この世との柵をひとつひとつ切り離してゆく・・・そんな人生の終着を迎えたい。

東山の裾野を駆け下る早朝の冷気にも、春らしい穏やかさが加わる3月半ばの京都駅――。



長い1番線のプラットフォームに、“Villa.Train”の重厚な蒼い車列が、穏やかに入線してきた。

向いの2番線、通勤電車の喧騒とは別世界の佇まいである。

“Villa.Train”文字通り別荘列車だ。

2021年4月、東京オリンピックの翌年、JR西日本が満を持して販売を開始した。

全長12mの2階建て車両、1階は台車間に車1台分のガレージを有し、2階が一般的なワンルームレイアウトのキャビンで、2点式UBと洗面台、ミニキッチンに冷蔵庫、ドラム式洗濯機を装備する。

両端のデッキから乗降し、キャビンの両側に屋根まで伸びる大きなアール窓があって、常時車窓を楽しめる。

初年度一年間の運用経費を含め、一両を破格の2,000万円で売り出した。

同時に、地方駅で不要となった広大な貨物ヤードや、操車場、車両基地を再整備し、給排水設備、自動車用の乗降プラットフォームを設営して“Villa.Site”と云う名称で開放した。

当初は機関車の牽引を必要とする付随車(トレーラー)だった為、運用に経費がかさみ、売れ行きも今一つだったが、安定核原子力発電モジュールのオプション追加と、それによる動力車(モーター)化により爆発的に売れ始めた。

子育てを終えた中産階級の夫婦が、古い住宅を売り払い、次から次へと購入し始めたのである。

運転指令所の集中制御による完全な自動運転が可能で、動力車だから狭軌のレールさえ

あれば単行で何処までも行けるが、殆どのオーナーは其々の車両を連結させ、編成を組んで運用した。

行く先々の“Villa.Site”で連結を開放し、1~2ヶ月停車して暮らす夫婦。

直ぐに車列を編成し直して、いつまでも走り続けるオーナー。

列島の海岸線を廻る複数の在来線ループは、彼らにとって恰好のジオラマレイアウトだった。

山陰本線の風光明媚な海岸線を、一昼夜掛けてゆっくりと巡ってきたその朝の“Villa.Train”は、飲料水の給水と汚水の排水の為、京都駅に1時間停車する予定だった。各車両の乗降ドアが開いて、数人のオーナーが眠たそうな様子でホームに降りてくる。

名物の朝粥を買いに走る者、朝から紅い顔してキオスクの缶ビールを買い占める者……。

そのうちの一人が、大きく背伸びをし両足を屈伸して、列車の後端に向けて軽くジョギングを始めた。

編成の中間辺りまで来て、何かに気が付いて足を止める——車体の大きなアール窓に近づき、朝露に覆われたガラス面を、首に巻いたタオルで拭って中を覗き込むと、鋭い悲鳴を上げて後ろにたじろいだ、大慌てで人を呼びに走る。

暫らくして、駅員2人を伴って3人で窓を覗き込む、窓際のソファーに深々と腰を下ろし、がっくりと首を折った男の背後が、一面の血飛沫で真っ赤に染まっていた……。

玲子と笑子のカップル、部下のジョン・クアリが京都駅に到着したのは30分後のことである。

現場の1番線ホームは、規制線が張られ一般通勤客の人だかりの中、既に科捜研のスタッフが臨場していた。

乗降ドアから降りてくる奥寺を見付けると、「早いよね奥寺君、仏さんはどんな様子？」

「初老の男性です……右の手背と右側頭部の射撃残渣が明瞭ですので、検死官の判断を待ちますが、蟀谷に銃口を当てた自死が妥当でしょうね。使用した拳銃も足元に落ちてました。」

黒い収納袋に入れられた遺体が、4人のスタッフに支えられ乗降ドアから降りてくる、それを見送りながら車内に入ると、10畳程の広さのキャビンは、鑑識スタッフでご

った返していた。

血に染まったソファの表面に白いテープで人型が表示されている。

「自死を装った他殺ってことは？」ソファの周囲を観察しながら玲子が呟く。

「ソファに座らせた状態で、身体を拘束もせずに拳銃を握らせ、銃口を頭部に押し当てたまま射殺するのは無理があります。ベットで寝たまま死んでたのなら分かりやすいけど・・・。」奥寺が答える。

「アルコールか薬物で、意識の無い状態で射殺されたとしたら？」

「そのあたり穴見女医執刀で、司法解剖されるようです。」

ソファと反対側のベッド上の窓ガラスに、無数の吸盤の痕に紛れて、廻りが放射状に白くなった穴が2か所見て取れる。

「――弾痕です、内装パネルの穴も含めて7箇所あります。」奥寺が位置を指差しながら呟く。

「足元に落ちてた拳銃は？」

「ステームロガーLCR、シリンダーが8穴ですので銃弾は22LRかショートでしょう、全弾撃ち尽くしてます。これから壁のパネルを外して、探します。」

「窓や壁に見境なく7発撃って、最後の一発で自死したって云うの？」

「この銃は、基本的にダブルアクションですが、最後の一発だけがシングルアクションになるんです。誰かに襲われて応戦して、最後の一発で観念して自死したのかも知れません……。」

「何よ！さっきと云ってることが違うじゃない！」横でメモを取りながら訊いていた笑子が金切り声を上げる。

ジョン・クアリがベッドの足元から何かを摘み上げる、慌てて奥寺がピンセットで受けてジップ袋に放り込む、何やら褐色小枝のような小さな断片だ、トゲがあって昆虫の脚のようにも見える。

「――ワタシ、コノ脚ワカリマス。アフリカデ見タコトアリマス！」

キャビンを後にしてホームに降りると、JRの制服を着た初老の男性が刑事に伴われて待っていた。

「列車に乗務されていた、担当の方です。」若い刑事が紹介する。

「“Villa.Train” コンシェルジュの瀬河と云います。」

「コンシェルジュ？車掌さんじゃないんですか？」笑子が丸い目で訊ねる。

「対応するのがお客様ではなくオーナー様ですので、“Villa.Train” ではコンシェルジュと称します。」

「乗務されていた車両は？」今度は玲子が尋ねる。

「――終端の付随車に乗っています。」

「お一人で？」

「10両以上の編成にコンセルジュの車両が付随します。通常は一名です、連結車両が20両を越えると、2名乗務となります。」

「基本的にどの様なお仕事なんですか？ホテルやマンションのコンシェルジュ同様、オーナー様に様々なサービスを提供されるのでしょうか？」

「基本的に、そのようなサービスは提供いたしません。ご存知のように現在JRグルー

プでは、運転指令所からの制御による完全自動運転が、全列車に於いて実現しまして、新幹線・在来線を含め、運転士という職種が無くなりました。乗務職種としては車掌だけになった訳ですが、車掌の一番重要な任務は緊急対応です。」

「崖崩れや、踏切事故のような運行障害への対応？」

メモを止めて、笑子が口を挿む。

「それは、運転指令所からの発令で最寄りの委託業者が対応します。」

「各車両設備の不調による緊急対応？」

「“Villa.Train” の場合、それはオーナー様ご自身の対応になります。JRの保証対象設備であれば、停車駅でメンテナンススタッフが対応します。私共が対応するのは主にオーナー様のフィジカル面です、運行中に急に体調を崩されたような場合、其々のキャビンにお伺いして、適切な対応を取らせて頂きます。従って全員が、看護師以上の医療資格を取得しています。」

「それ以外で、各キャビンに出向くことは？」 玲子が尋ねる。

「——まず有りません。」

「どうしても必要な場合は、何処をって行かれるんでしょう？キャビンに通路のようなものは無かったと思いますが？」

「1階ガレージ横の通路を使用させて頂きます。その為“Villa.Train” ご契約時に両端デッキとガレージは、専用使用の共用部分である旨、ご承諾頂いています。」



「昨夜の“Villa.Train” の運行に関して何か変わったことは？」

「昨日早朝北九州の門司駅近くの“Villa.Site” から乗務を開始しましたが、特に変わったことはありません、北九州出発時23両の編成が西出雲の“Villa.Site” で8両が編成離脱し、2両が加わっています。」

「事件のあった車両はどこから編成に加わったんでしょうか？」

「あの方は、常時移動しています。“Villa.Site” で離脱することは少なかったと思います。当然、私が乗務する以前から、車列に加わっていました。」

専用のタブレット端末を操作しながら、初老のコンシェルジュが答える。

「——変わった事と云えば早朝4時頃、山陰本線が綾部から京都の間で、停電事故の

為上下線とも不通になったんです。運転指令所からの指示で緊急に舞鶴線に入り、北陸新幹線の丹波トンネルを経由することになりました。新幹線上下始発便の通過の為、トンネル内の待避線で約30分間の停車を余儀なくされました。」

「ルートの変更はその都度、オーナー様に連絡されるんですか？」

「——深夜早朝の話ですからね、起きてらっしゃるオーナー様もいますので、キャビン内のインフォメーションモニターでお知らせしています。」

“Villa.Train” 17両の車列は、全乗客の事情聴取が終わるまで、京都駅1番線にそのまま留置されることになった。

「ジョン・クアリ、あなたさっき何か云ってたわね？」

改札口の方向に歩きながら、思い出したように玲子が振り返る。

「ムシノ脚ノコト・・・？」

長身の上半身を折り曲げながら、ジョン・クアリが顔を近付ける。

「スーダンノ地面ハイマワッテルノ、ナンドモ見タコトアリマス、ツカマエテ油デ揚ゲテ・・・。」

「———食べちゃうの！」

口を捻じ曲げた玲子の顔が、酷く年増に見えた。

その時、先程の若い刑事が追っ駆けてきて、「黒木係長、仏さんの素性が分かりました———。」

息を切らせながら手帳のメモを読み上げるのが、初々しい。

「———松木省吾63歳、大阪で産業廃棄物処理業を長年営んでいました。10年前に会社の経営権を譲渡し、今は膨大な蓄財の下、悠々自適の生活なんだそうです。3年前に“Villa.Train”を購入し、それ以来全国を走り廻って、大阪の自宅マンションには寄り付かないようです。離婚調停中の妻との間に、子供はいないようです。」

「それと検視官によると、死後約1時間、自死と推定されるとのことですよ！」

「1時間って云うと、丁度丹波トンネルで新幹線待ってる頃よね。“Villa.Train”のオーナーたちの事情聴取は？」

「一課のスタッフ全員で手分けして始めています。夫婦や家族を含めると、17両で総勢30名になりますから、多少時間が掛かります。」

「分かっていると思うけど、死亡推定時刻に銃声を聞かなかったか、自分の車両のガレージやデッキを、誰か通るのに気が付かなかったか、ちゃんと確認してね！」

松木省吾の妻は、大阪駅を西側から見下ろす超高層マンションの最上階に住んでいた。



資産家の配偶者とは思えない、小柄で控えめな容姿の熟女であった。

「先程大学病院で、主人に逢ってきました・・・これから司法解剖だそうで、同席した刑事さんから説明を受け、同時に事情聴取も受けまして、時間が掛かるって云いますし、こっちの準備もあるので、連絡があるまで此処で待機するようにしました。」

黄色の西日が、応接テーブルの紅茶カップを一層紅く染める。

「今朝、丹波トンネル停車中に、ご自身で頭部を撃ったようなんですが、自殺される理由に、何か心当たりは・・・。」笑子が聴取の口火を切る。

「一切ございません・・・10年前に、会社の経営を離れてからは、唯一の趣味の鉄道に没頭しましてね、きらきらした眼で列車に乗っていました。“Villa.Train”を購入してからは満足し切った様子で、これと云った不平も不満も無かったと思うんですが・・・。」

「会社経営に於いて、人から恨まれるような事は？」

「自殺じゃないんですか？——そりゃまあ競争社会ですからね、ゴミ屋さん仲間の仕事の遣り取りでそんなことも有るかも知れませんが、仕事の話は余り喋らない人でしたから。」

「ご主人様が拳銃を所持されていたことに関しては？」

「ハワイにコンドミニアムを一部屋持っていて、リボルバーと云うんですか、掌に収まる位小さいのを一丁持ってました。護身用だって云いましてね、日本に持ち込んでいたなんて気が付きもしませんでした。」

「大変お尋ねし難いんですが・・・。」

「——離婚調停のことですか？結婚当初からの約束なんです、もし子供が出来なかったら、主人が仕事を辞めるのを機に、財産を等分して離婚し、其々好きな事を始めるって・・・不動産とか証券とか色々有りますから分割協議中なんです。先方はとっくの昔に好き放題始めているのにね・・・。」

「最後にお尋ねします。ご主人様の性格なんですが、何か他人と違うような部分は・・・。」横で話を訊いていた玲子が口を開いた。

「ごく普通の旦那でしたわ。でも強いて言うなら・・・虫が酷く嫌いでしたわね。」

「——虫？」

「此処の最上階を購入したのも、大阪駅のホームを何時でも見下ろせるって事もあるんですが、この高さだと蠅や蚊も、蜂や蟻も一切上がってこないんです。棲みはじめて20年になりますが、ゴキブリ一匹たりとも見たことがありません。」

“Villa.Train”のオーナーたちの事情聴取には、有力な成果が無かった。

早朝のトンネル内、殆どの乗客は就寝中で、徹夜で飲み明かしていた学生のグループも

、新幹線の騒音で銃声は聴こえないし、デッキやガレージを歩く人の気配にも気が付かなかったと証言した。

「いくら酔ってても、デッキに人が来れば気が付きますよ刑事さん。キャビンとの間のドアは、御覧のように強化ガラスの一枚板ですからね――。」

松木が亡くなったソファの肘掛に、鍵のかかるシークレットドロワーが発見された。中には未使用の22口径銃弾が、ケースのまま入っていた。

「これでソファに座ったまま死んだ理由が分かります、このドロワーから拳銃を取り出して撃ったんですよ。乱射した7発も、銃弾発見後の弾道鑑定によって、同じソファのこの位置から発射されたことが、判明しています。」

次の朝、京都府警科捜研のラボで、奥寺がパソコンの写真を示しながら喚きたてている。



「肘掛のカバーを外し、ドロワーの鍵を開けて拳銃と銃弾を取り出し、シリンダーに8発装填して、それから撃ったって云うの？もし人に襲われたんだとしたら、随分悠長な話ね・・・。」

「だったらやっぱり、単なる自死かも・・・。」

「7発も乱射したのは、余程の恐怖を感じたからよ。自らの命を絶つ以外、絶対に逃れられないような恐怖、自死の決定的な動機となる圧倒的な恐怖よ！」

玲子が奥寺の机の角に腰を下ろしたまま、強い調子で云い放った。

「もっと情報が必要だわ、松木省吾の友人関係、使用した拳銃に関して、“Villa.Train”の構造と運用について、西出雲の“Villa.Site”って云うのも調べてみる必要がある、それと最後は丹波トンネルね・・・。」

「“Villa.Train”については任してください！仏さんの車両だけ切り離して、鉄道博物館の留置線に引き込んでありますから。」

ドヤ顔の奥寺が胸を張る。

「友人関係と拳銃に関して、私が調べます。」

笑子がショルダーバッグを肩に掛けて立ち上がる。

「司法解剖はどうなったの？」

「まだ、報告がありません。」

「だったら、ジョン・クアリと大学病院に訪ねてみる、笑ちゃんあなたは・・・？」

「———遠慮しときます。」

「穴見先生の報告が、遅くなるのはめったにない事ですから・・・。」

女医は何時もの様に、自分の研究室の時代掛かった肘掛椅子に、深々と腰を下ろし、長い電子煙草を銜えて、時折思い出したように煙を吐いている。

「解剖は、昨夜のうちに終わったわよ。報告書も一応書いてある・・・。」

「何か気に掛かることがあるんですか？」玲子が尋ねる。

「——無いわ、ごく一般的な22口径の銃創よ。銃弾も創洞の中に見つかった、脳組織の圧排や裂創もこの口径相応のもの、射入口への毛髪への圧入も表皮の挫滅輪も教科書通り、大量のアルコールや薬物摂取の痕跡も無かった。でも、何だか釈然としないのよね〜。」

「——どう云うことですか？」

「綺麗すぎるのよ！——まるで測ったように脳幹を貫いてる。落ち着き払って息を止めて撃たないと、自死しようって人間には到底出来ない芸当よ。」

そう云って立ち上がると、苛々した表情で長い電子煙草を振り回す。

「とりあえず、今日の処の報告書を持って帰って。私はもう少し頭蓋骨の損傷を調べてみる。」

「報告書の内容が変わることは？」

「——あり得るわ。」

玲子の横に立つジョン・クアリの長身を舐める様に見上げると、「あなた、今度の非番に此処に来なさい、全身検査してあげる！もし悪い処があれば全て見つけ出してあげるから。」

府警本部へ帰る道すがら、「検査シテモラッタ方が良イデショウカ？」

「スッポンポンにされて、体中の穴穿られて、器具挿入されて、そこら中写真撮られるわよ！」

西出雲の“Villa.Site”はJR出雲神西駅の東側に在った旧総合車両場支所を改装した施設だ。

広大な敷地の彼方此方に、“Villa.Train”の車両がばらばらに留置されている、其々のオーナーによって周囲にキャンプ用タープテントが張られ、どの車両も居心地のよさそうな環境である。

「ここで“Villa.Train”に自家用車を出し入れするんですか？」

玲子の質問に“Villa.Site”の責任者が答える。

「そうです、車両に沿って背の低いプラットホームがあるでしょ、それが皆一般道路に繋がっています、“Villa.Train”のガレージ備え付けのリフトでホームに車を降ろして、

観光や買い物に出かけるんです。1、2か月此処で過ごされるのが普通ですので、車は必要です。」

「——一列車を編成するのは？」

「この先の引き込み線上で、担当コンシェルジュが自分のタブレットを操作して、全て自動で連結編成作業を行います。」

「その時のコンシェルジュとオーナー様の遣り取りは？」

「行き先、つまり次に連結を開放する“Villa.Site”の確認と、キャビン内インフォメーションモニターの同期、バイタルモニターの同期、乗降ドアの開閉操作の同期くらいですかね。」

「——同期とは？」

「コンシェルジュのタブレットと、各車両のコントロールユニットをWiFiで同期させます、キャビンのモニターに必要な情報を表示させたり……。」

「オーナーさんのバイタルもモニターするんですか？」驚いた表情で、玲子が首を上げる。

「最も重要な項目です、一人だけで車両を使用されるオーナー様が多くて、移動中の体調不良への対応は、私共の使命です。オーナー様には、バイタル測定機能付きのスマートウォッチを着けて頂くようお願いしています。」

「乗降ドアの開閉は？」

「それも緊急対応の為です。各車両の乗降ドアは基本的に、車両内部のボタンを押すか、オーナー様所持のリモコンキーでしか操作できません。もし、緊急に車両から退避する必要が生じた場合、コンシェルジュ付随車から一斉に操作します。」

「それは、特定の車両のドアだけの操作も、出来るんでしょうか？」

「——可能です、実情はリモコンキーの紛失に伴う対応が殆どです。」

「デッキやキャビンの映像を監視するってことは？」

「決してありません！オーナー様のプライバシーに拘ることですので。」

ジョン・クアりに車を運転させて、携帯で奥寺を呼び出す。



「——さっき出雲を立て、いま高速帰ってる途中。確認して欲しいんだけど、松木は腕に時計してた？スマートウォッチ着けてたんじゃない？」

「——いま写真見てますが、着けてないですね。確か他の腕時計と一緒に洗面化粧台の上に在ったと思います。こっちも、2点報告します。キャビンの換気ダクトの中から、日本の在来種ではない昆虫の死骸が7体出てきて専門機関で鑑定中です。それと、

ソファの上の棚に置かれていた液体芳香剤の成分の中に、尋常でないものを分離しました。」

「―――何なの？」

「ブラテラキノン、ある種の昆虫の行動に決定的な作用を及ぼす物質です。本部に帰られたら詳しく説明します。」

翌朝、捜査一課一係のブースで、奥寺を交えてのディスカッションが行われた。

まず笑子が報告する。

「松木省吾の産業廃棄物処理会社は、大阪の此花区に事務所があるんですが、父親の家業を引き継いだものです。省吾の代で一気に売り上げを増やしたのは、廃棄物の海外輸入事業を始めたからです。」

「―――どういう事？」

「発展途上国で処理出来ない廃棄物を輸入して、再資源化、或いは無害化処理を施し技術料を収益とする事業です。業界内部の噂では、かなり際どいこともやったようで、様々な局面で政治家を動かしていたようです。」

「虫が嫌いだって云うのは？」

「本当のようです、会社の従業員や取引先の担当から訊いた話ですが、事務所のそこら中に殺虫スプレーが置いてあって、朝礼前に全員で事務所の床の彼方此方にスプレーを吹いて廻るんですって……。極めつけは、ハワイのホテルでのエピソードです。」

「―――どうしたの？」

「社員旅行で、従業員全員引き連れてホノルルのホテルに泊まったんですが、オプションツアーから帰ってきた夜、自分の部屋に入るなり引き出しからピストルを取り出して、乱射し始めたんです。駆けつけた警官が宥めて話を訊くと、床をゴキブリが這い回ってたって云うんです。ホテルのメイドが一人流れ弾に当たって腕に怪我をして……。相当な賠償金を払ったようです。それ以降ハワイのホテルには泊まらなくなって、コンドミニアムを購入したようです。」

「産廃処理の工場とか埋立地は？」

「此花区の事務所に併設して処理工場があります。大阪湾の埋め立て地と、丹波山中に広大な土地を持っていて、そこで最終処分をしていたようです。」

「―――どの辺り？」

笑子が地図アプリを起動させて、丹波の位置を指し示す。

「丹波トンネルが近くを通ってる辺りね……。奥寺君は？」

虚を突かれた奥寺が飛び上がる。

「―――か、換気ダクトで見つかった昆虫の種類が分かりました、マダガスカルオオゴキブリ、ヨロイモグラゴキブリの2種類だそうです。何れも体長80mmにもなる大型種で、アフリカやオーストラリアが生息地らしいです。」

「それで、ジョン・クアリが見たことあるのね！」

「松木の会社は、アフリカからもオーストラリアからも、廃棄物を輸入しています！」  
手帳を見ながら、笑子が叫ぶ。

「―――ブラテラ何とかって云うのは？」

「ブラテラキノン、12年前にチャバネゴキブリから単離同定された、性フェロモンの一種です。ゴキブリ目に共通して、強い集合行動を促すフェロモンのようです。」

「つまり纏めますと、“Villa.Train”で日本中を走り廻たその何処かで、外来種のゴキブリが松木の車両に紛れ込んだ。それがどういう訳か、芳香剤に微量混入したブラテラキノンに誘われて、あの朝キャビンの中を這い廻った、新品の芳香剤の封を切ったのかも知れません。一匹見つかりと100匹はいるって云いますから、700匹の大集団ですよ、直ぐ頭上の棚に置いてあったから、身体や顔の上も這い廻ったんじゃないかな。半狂乱でパニックに陥った松木は銃を7発乱射した後、自暴自棄に落ちて自ら蟀谷を撃った。そんなところじゃないですか？」ドヤ顔の奥寺が早口で捲し立てる。

「――結論を、急がないの！」玲子が窘める。



「松木省吾にはずっと以前から面倒を見続けてる部下がいます。」

遮るように笑子が話し始めた。

「杉田剛蔵と云うんですが、先代からの子飼いの従業員で、殆ど入社もしないで遊び呆けているのに、大層な給料を払っていたようです。酒癖が悪くて何度も問題をおこし、その都度松木が大金払って尻拭いしていたそうです。現在は、やはり酒が絡んだ喧嘩で相手を撲殺した罪で、無期懲役が確定して、大阪刑務所に服役しています。」

「何か、弱みを握られていたのかも知れないわね・・・。」

「それと、これは関係無いかも知れませんが、松木の奥さんと、瀬河コンシェルジュが同郷なんです、年齢も同じで、同じ高校を卒業しています。」

「――何ですって！」

「二人とも宮城県仙台市出身で、同じ高校卒業後、瀬河コンシェルジュは東北大学、松木の奥さんは関西に引っ越して神戸大学に其々進学しています。」

「笑ちゃん！その二人のこと、もっとよく調べて！杉田剛蔵には私が会ってくる。それと奥寺君は、車両設備の使用状況の履歴を調べられない？換気設備や乗降ドアの開閉履歴、ゴキブリが何処で紛れ込んだか、見当を付けたいの。」

「コントロールユニットのストレージを調べれば、解ると思います。」

杉田剛蔵は、隣接する大阪医療刑務所に移されていた。

担当の刑務官に話を訊くと、末期の肝臓がんと回答だった。

接見室に車椅子で現れた杉田は、50代とは思えないほど頬がこけ、憔悴していた。

「松木社長のことかい？ニュースで見たよ・・・。」

ゴキブリに襲われた話をすると、「自業自得だ、いい気味だ！」

「———何故？あなた松木さんに随分助けられたんでしょ、お金も随分貰ってたようだし。」

長い静寂が接見室を包み込む、じっと瞼を閉じていた杉田が穏やかな眼差しで、「本人も死んじまったことだし、俺もこの病気患ってもう永くねえ。隠してても仕方ねえから、あんたに全部話すよ。———ゴキブリに襲われたとしたら丹波トンネルの中だろ、あのトンネルは俺たちが長年廃棄物を埋め立てた大穴のど真ん中を貫いている。輸入廃棄物にゴキブリのタマゴが付いてるんだ、埋め立てた地中の隙間で大繁殖する、水抜きパイプなんかからトンネルの中に出てくるのさ。」

「———20年も昔の話だ、俺と社長二人だけで丹波の埋め立て地の大穴を見廻ってた。20m先の反対側の縁を、若い女が一人歩いていた。突然足を踏み外して穴の中に転落したんだ。忽ちそこら中からゴキブリの大群が女の周りに集まってくる、助けようと縁を廻って駆け出したが、社長が制止したのさ。警察沙汰になると、廃棄物の不法投棄がバレるって云うんだ。それまで様々な医薬品や化学物質を、処理もせずにそのまま投棄していた。充分深い穴だから、しっかり埋め戻せば、環境に出てくることは無いって云い張ってた。女は暫らくゴキブリの中でもがいていたが、ゆっくりとゴミの穴に沈んでいった。大急ぎで作業場からブルを廻してきて大穴を埋め戻したのさ。」

「それ以来、ゴキブリを見ると狂ったようになった。やっぱりあれがトラウマになってたんだろうな・・・ある意味気の毒な男よ。」

「じゃその件は、あなた達二人だけで20年間？」

「かみさんには話したって云ってたなあ。半狂乱になって喚いたのを、後で問い詰められてな。」

「それで、あなた如何したの？」

「何もしねえよ。何もしねえどころか、飲んだくれて会社に出なくなってもちゃんと給料振り込んでくれたからな、街でいざこざ起しても金で握り潰してくれた・・・流石に悪いなと思って、社長がピストル輸入したいって云ってたから、知り合いに頼んで密輸してやった事もあったな・・・。」

「今度の件でも、社長に泣付いたんだ。そしたら、いくら政治家動かしても死刑の処を無期にするのが精一杯だって・・・丹波の埋め立ての件は喋るな、喋れば確実に死刑になるって、引導を渡しやがった。だから自業自得で、いい気味なのさ。」

「———その女性の遺体は？」

「まだ、大穴の中だろう。酷えはなしだ・・・。」

接見室を後にして、ジョン・クアリが待つ駐車場に急ぐ。

膨らみかけた櫻の蕾を押し留めるように、建物の間を寒気が吹き通す。

暗鬱な気持ちを包み込むように、玲子はコートの際を立てた。

府警本部に帰ると、奥寺が待っていた。

「松木の車両のコントロールユニットを調べてみました、そしたら大変なことが解ったんです。」

「――なに？」

「丹波トンネルに停車していた時刻に、瀬河コンシェルジュのタブレットからの操作で、乗降ドアが一度開閉されているんです。それも、20分間の間隔をあけて！」

「――じゃあ何、丹波トンネルの中で20分もドアが開いたままになってたって事？」

「その通りです、更に続きがあります。コントロールユニットから逆に瀬河のタブレットにネット経由でアクセスしてみたら、どうなったと思います？」

「――だから、何よ？」

「事件のあった朝4時前に、山陰本線の変電システムに侵入した痕跡が残されていたんです！」

「架線の停電は、瀬河コンシェルジュの仕業？」

「その可能性が、強いです！」

その時、笑子が息を切らせて刑事部屋に走り込んで来た。

「――解りました先輩！」

「どうしたの？落ち着きなさい！」

渡されたペットボトルの水を一気に飲み干すと、「瀬河コンシェルジュ、本名瀬河裕也と松木紀子(旧姓広瀬紀子)松木の奥さんです。二人は高校生の時から恋愛関係にあったようです。仙台の同じ高校を卒業後、親の仕事の関係で仙台と関西の大学に進学しました、在学中も遠距離恋愛を続けていたようで、瀬河がJR西日本に就職したのを機にプロポーズしたんですが、親の反対で実現しなかった。紀子の親は環境省の官僚で、政界に進出する為、松木の資力を当てにしていたようです。半分駆け落ちのような状況になりながら、結局無理やり引き離されたって、友人たちの話です。」

「瀬河はその後、別の女性と結婚し一人娘が産まれた直後、死別しています。男手ひとつで育て上げた娘も、溺愛してたようですが、今から20年前に登山中行方不明となり、既に失踪宣告を受けています。」

「――登山？」

「大学で、ワンダーホーゲル部に所属し、比良山脈の縦走に参加していたんです。途中で体調を崩し一人でビバークしたんですが、下山途中で道に迷ったみたいです。」

「比良山脈って丹波山地の近く？」

「———すぐ隣です。」奥寺が答える。

「その娘は何と云うんだ？」



「———瀬河範子です。」

刑事部長室で、永山が腕組みをしながら暮れゆく街路を見下ろしている。

「字は違うが、学生時代の恋人の名前をつけた訳か……。瀬河範子？聞き覚えがあるな、20年前……。そうだ！俺もその事件の捜査に加わってた！」

「約一年の間、比良山脈から丹波山地にかけて大規模な捜索を繰り返したんだ、結局何の手掛かりも出てこなかった。」

「廃棄物の穴に転落した女性が、瀬河範子だと思います。」

「土砂で深く埋められたから、一切の手掛かりも出なかった訳だ。」

「松木紀子の神戸大学の所属は、理学部生物学科です。大学院でも生物学を専攻しています、ブラテラキノンを手に入れるのも……。」

「二人が何処かで再会し、瀬河の娘が亡くなった事情を共有し、松木紀子はそのブラテラ何とかを芳香剤の中に混入させて、松木のキャビンに置いておく。瀬河はタブレットを使って、山陰本線を停電させ、丹波トンネルの待避線に“Villa.Train”を停車させて、松木の車両の乗降ドアを開放する。何も知らない松木は、ゴキブリに襲われて蟀谷を撃って自死する……。瀬河の動機は分かるが、松木紀子とすれば何のメリットがあるんだ？」

「離婚調停中らしいんですが、離婚が成立しても十分な資産の分割は得られないかも知れません。自死が認められれば、子供がいませんので、全額相続できます。」

「そういうことか……。しかし、自死するかどうかは飽くまで松木本人の判断だ、ゴキブリに襲われて正常な精神状態になかったとしても、瀬河が直接手を下していない限り、犯罪とは云えん。可能性に頼った殺人事件などあり得ん！」

「ただし、可能性があるなら捜査すべきだろう！丹波トンネルの現地捜査は、私からJRに協力を要請しておく！」

その時、穴見から緊急のメールが入った。

“大急ぎで大学病院まで来て！前回提出した解剖報告書を撤回するわ！”

ジョン・クアリを含めた4人の間を、例によって穴見女医が電子煙草を燻らせながら巡って歩く、口元に含み笑いを湛えて如何にも満足そうだ。

「如何したんですか先生、前の報告書撤回するって、何か余っほどのドジ踏んだんですかあ？」

笑子がこれも例によって辛辣に尋ねる。

「まあ、そう急かせなさんなって・・・いま、頭の中で整理してるんだから。」

「――あのね、あれから仏さんの頭蓋骨の破片を集めて、元の位置に配置してみたの、ジグソウパズルみたいだね。そうしたら何だか破壊の方向がおかしい・・・力の掛かり具合が一定じゃないのね。そうこうしてる内に、圧入された破片の中に、破断面に金属が付着したのを見つけた。金属は銃弾の残渣、残渣が付着した骨片が脳に圧入されているのよ、あり得ないわ！残渣は発射された銃弾の後に残るもの、つまり一度撃った銃創の上からもう一度銃撃して、残渣の付着した骨片を圧入したのよ。つまり、この仏さん、同じ場所を2度撃たれてる！」



茫然とした空気が、穴見の研究室を包み込む。

「松木が撃った8発目の22口径銃弾は、骨を貫通できなくて、頭蓋骨表面に残留したって云うんですかあ？」奥寺が大声を上げる。

「その通り！骨にめり込んだ弾を何かで抜き取って、同じ位置をもう一度撃ったのね・・・。」

「松木以外の誰かが、ですよね！」玲子が強く念を押す。

「当然よ、一回目の銃撃で本人は気絶したろうからね。」

長い静寂が続いた後、笑子が低い声で呟いた。

「とんでもない石頭だった訳ですね、松木省吾って・・・。」

玲子がプッとふき出した。

若狭湾からの、ヨードを含んだ爽やかな潮風が、長いトンネルに入ると同時に、しっとり澱んだ生温い空気に替わった。

北陸新幹線丹波トンネルは、福井県小浜市南部から、京都市北部に至る全長40Kmに及ぶ長大トンネルである。

新幹線規格の鉄道トンネルではあるが、舞鶴線・小浜線の京都方面短絡線として在来線と共用されるのは、青函トンネルと同様である。

“Villa.Train” が停車したトンネル内待避線は、上り在来線のため小浜方面からトンネル

に進入させる必要がある。

長い編成を回送させる訳にもいかず、実情に則した捜査の為にと、松木の車両に一係のスタッフ全員と奥寺を乗せて、単行で回送させることとした。

ジョン・クアリは何故か朝から、大きなリュックを背中に背負っている。

デッキ妻壁のガラス窓からトンネルの前方を見ると、闇の中を3条のレールが何処までも続いている。

「どうして別々にレールを敷かないんですか？トンネルを2階建てにすれば、待避線なんて必要無いじゃないですか？」

笑子が、隣に控えるJRの案内人に質問する。

「掘削断面積が一気に増えるからです。トンネル工事のコストは、掘削断面積に大きく影響されます。」

15分程で問題の待避線に到着する。

連結ドアを開け、タラップを降ろしてコンクリートの道床に立つ。

高輝度バルーン照明が設営され、車両の前後終端まで照らし出された。

「待避線だけでも、総延長500mあります。当日の“Villa.Train”は17両でしたので、この車両も丁度この辺りに停車したものと思います。」

「瀬河コンシェルジュの付随車は？」

「この後方、約120mの位置です。」

両側の壁と車体との隙間は30cm程しかない、待避線のトンネル一杯に車両が詰め込まれている感じだ。

それを察して案内人が説明する、「建築限界一杯にトンネル壁面が施工されています。青函トンネルの反省で、新幹線の風圧に在来線を晒さない工夫です。」

「これじゃ、道床を歩いて車両間を120mも移動するのはとても無理ね、屋根の上は？少し余裕があるみたいだけど・・・。」

玲子が屋根を見上げながら呟く。

「新幹線規格の、交流25,000Vの架線が直ぐ上に在ります、安定核原子力仕様の“Villa.Train”は架線の電気は使いませんが、屋根に上がるのは大変危険です。」

今度は床に視線を落とす、レールの上に幅40cm程の溝があって水が溜まっている。

「——これは？」

「待避線の排水溝です、周囲の地盤からの水抜きパイプがそこに通じています。此処だけの話ですが、運用開始当時から巨大なゴキブリが常時這い回ってまして、余り近寄らない方がいいですよ。」

溝の先を追った玲子の視線が、照明に照らされた何かを捉えた。

速足で道床を移動する、150m程歩いた水面に青白い袋のようなものが浮いていた。

「医療用のゴム手袋のようですね、血が付いていますよ・・・。」

奥寺がピンセットで摘まみあげる、小石のようなものが中に入っている。

その更に先には、両端が丸い大きな板のようなものが・・・引き上げてみると裏側に頑丈そうな車輪が付いている、立てると笑子の身長程もあった。

「巨大なスケートボードのようですね、見覚えは？」案内人が首を横に振る。

改めて周囲を見渡すと、植物が枯れたような塊が所々に転がっている。

奥寺が、スケートボードが置かれていた溝の底から黒い破片を取り上げたその刹那、トンネル全体が俄かに揺れ始め、待避線を轟音が駆け抜ける。

「下り新幹線の通過です！」案内人が叫ぶ。

新幹線の轟音に重なって、前方から男の笑い声が聞える、見るとジョン・クアリが道床の隅を指差して歓喜していた。

無数の巨大なゴキブリの小山である、硬い殻をカサカサと擦れ合わせながら蠢いている。

玲子が鋭い悲鳴を上げて笑子にしがみ付いた、身体が小刻みに震えている。

「ジョン・クアリ！少し捕まえてくれ、前回のと照合する！」奥寺が叫ぶ。

我意を得たりと、自分のリュックに掻き込み始めた、忽ちゴキブリで一杯になる。

「あなた！そのリュック！府警本部に持って帰るつもりじゃないでしょうね！」

青ざめた顔の両眼を、どっかりと座らせた玲子の大声が、トンネル内に響き渡った。

———仙台市の青葉山公園である。



街を見下ろす高台の瀟洒な木のベンチに、熟年の男女が腰を下ろしている。  
2日前に東京で開花宣言のあった桜の蕾も、この地ではまだまだ固く小さい。  
広瀬川が大きくうねって眼下を流れる。

伊達正宗の騎馬像の周りで、学生たちが明るい声を上げている。

上空を椋鳥の群れが鳴きながら通り過ぎる。

温もりを含んだ心地良い春風が、公園を吹き抜ける。

「———瀬河コンシェルジュ、松木紀子さん。」

熟年の男女が振り返る。

「ああっ・・・あの時の刑事さん、こんな処でどうかされましたか？」

「あなた方を、殺人罪とその幫助罪で逮捕しなくてはなりません。」

「———どういう事でしょうか？」

「丹波トンネルの待避線に、行って参りました。」

「そうでしたか・・・。」

笑子から渡された逮捕状を提示しながら、玲子が話し始める。

「まず松木紀子さん、あなたは被害者が“Villa.Train”を購入した折、特注のソファをプレゼントしていますね。シークレットドローをメーカーに細工させたのもあなたの指示です、被害者が密輸した拳銃を、隠す為の引き出しです。そしてその直ぐ上の棚に、ブラテラキノンを添加した芳香剤を置いた。———これらが松木紀子さん、あなたの殺人幫助の行為です。」

ゆっくりと熟女の前を通り過ぎた玲子が、瀬河の方に向き直る。

「さて、瀬河コンシェルジュ。あなたは先ずあなたのタブレットを使って、山陰本線の停電事故を惹起させた。そして“Villa.Train”を丹波トンネルの待避線に誘導し、被害者の車両の乗降ドアを開放した。そして、起こるべきことを付随車の中で静かに待ったのです。———しかし、起こるべきことが起こらなかった。」



瀬河の周りを歩きながら、玲子が更に続ける。

「被害者のスマートウォッチからのバイタルデータに変化が見られない、一度大きく跳ね上がった心拍数が暫らくすると安定し、それがそのまま継続している。そこで、準備していた2段目の行動に移った。車輪の付いたボードに寝そべて、溝の中を被害者の車両へと向かったのです。デッキに上る前に、紀子さんから渡されたブラテラキノンを使って、ゴキブリの大群を車外に追い出した。被害者に近づくと、銃弾が頭蓋骨に留まったまま気を失っている、死んではいなかったのです——。」

「冷静なあなたは、ソファアのドロワーから新しい銃弾を取り出し、リボルバーに装填した。被害者の頭に留まったままの銃弾を、取り除く為の適切な道具が見当たらない。咄嗟にあなたは、スマートウォッチのベルト金具を利用しました。血を洗い流して洗面化粧台に置いておく、如何にも最初から着けていなかったかのように——。」

「被害者の頭の、同じ位置を銃撃したあなたは、再びボードに乗って付随車に取って返したのです。」

「その時に捨てた、ゴム手袋が此れです・・・被害者の血液が付着しています。使用済みの22口径銃弾が、手袋の中に一発入っていました。」

奥寺が、ジップ袋の中の証拠品を示す。

「その手袋に、私の指紋でも？」

「いえ、裏返されて溝の中で水没していましたので・・・。」

「それじゃ・・・。」

「黒木係長が今話した内容は、これの映像に基づきます。」

奥寺が再びジップ袋の中の黒い塊を示す。

「自動車用のドライブレコーダーです。溝の中に水没し踏みつけられて壊れていましたが、何とか映像を復元できました。」

「現場臨場の折、アール窓に吸盤の痕が幾つか残っていました。多くの鉄道マニアは、車窓の景色をエンドレスで撮影して、動画サイトに投稿したり、後で再生して楽しん

だりするものです。被害者も恐らくその例に漏れずと考えたのですが、キャビンにビデオカメラは残されていませんでした。」

「しかしそれは、外の車窓を撮影したもので・・・。」

「そうです！車窓のガラスに反射した、あなたの全ての行為が収められていました。」

「キャビンを立ち去るときに、初めてドライブレコーダーに気が付かれたんですね。映像を確かめる時間もなく、そのまま持ち去った——。」

厳しい視線で振り返ると、凜とした声で云い放った。

「——瀬河裕也、あなたを松木省吾の殺人容疑で逮捕します！」

被疑者を乗せた2台のパトカーに続いて、玲子たちの黒パトが仙台市内を駆け抜ける。ハンドルを握るジョン・クアリの顔が何時になくやけている。

「どうしたのジョン？随分楽しそうだけど・・・。そういえばあなた、あのリュック如何したの？」

「友達ノ、アフリカ料理店ニモチコミマシタ、キョウ帰ッタラミンナデ、パーティデス！」

玲子が再び顔を顰める。

助手席の笑子が振り返って、「でも先輩、瀬河裕也はどのようにして手袋やドライブレコーダーをそのまま待避線の溝に捨てたんですか？SDカード抜き取って、しっかり処分すれば逮捕出来なかったでしょ？」

「丹波トンネルを、お墓だって考えてたからよ・・・映像は娘さんへのお供え物、“**こうやって無念を晴らしたぞ**”って・・・たとえ証拠が残っても、あの待避線から持ち出すことが出来なかったんじゃないの。ほら、枯れた植物の塊が残っていたでしょ、あれは献花、瀬河はあそこを通るたび、弔花を供えてたんじゃないの・・・。」

「でも今度の事件、20年前の事件と共通点があるわね。」

「何処がですか？」

「娘さんが穴に落ちた後、ブルで埋めた事と、自殺しかけた松木の頭に、再び銃弾を撃ち込んだ事。後の事さえなければ、事件じゃなくて事故で処理され、二人とも未だ生きていたかも知れないのに・・・哀しいわね。」

—————終わり。

以上、全てフィクションであり、喩え実在する個人・団体と名称等が共通でも、一切の関係がありません。悪しからずご了承ください。

尚、添付した写真は PhotoAC から転載させて頂きました。

## 杜の都で私を愛して

<http://p.booklog.jp/book/125259>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125259>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト